

## ✓ 神奈川大地震、3年確率0.5-2%超の脅威

神奈川県は、首都圏に位置する地震多発地帯として、歴史的に大地震の脅威にさらされてきた。南海トラフ巨大地震、相模トラフ地震、活断層型地震などのリスクが指摘され、特に2026年2月19日時点から今後3年以内に震度6弱以上やマグニチュード7以上の大地震、津波高3メートル以上の大津波が発生する可能性は無視できない。政府の地震調査委員会が2026年1月に更新した長期評価では、南海トラフの30年確率が80%程度に引き上げられ、神奈川への影響として震度6弱と津波9mが想定される一方、相模トラフや三浦半島断層群の切迫性も高まっている。これらのデータは、1946年の昭和南海地震から80年経過した経緯や、平均発生間隔の科学的モデルに基づく。

本レポートの必要性は、こうした政府公表データを定量的に分析し、住民や行政の防災意識を高める点にある。過去の発生間隔、最新確率、想定タイミングを統合的に評価することで、切迫したリスクを明らかにする。目的は、南海トラフを含む全地震タイプの3年以内確率を推定し、歴史的経緯から最新更新値を比較、具体的な被害想定を提示することだ。以下では、南海トラフ、相模トラフ、活断層の各セクションで詳細に分析し、防災対策の指針を示す。こうした知見が、命を守る備えを促すきっかけとなるだろう。

### 神奈川県の地震・津波リスクの概要

神奈川県は、首都圏に位置する地質的・地理的に複雑な地域であり、多様な地震リスクを抱えています。県域は相模トラフ、南海トラフ、活断層帯が交錯するプレート境界に近く、活発な地殻活動が特徴です。相模トラフはフィリピン海プレートが北米プレートの下に沈み込む場所で、1703年の元禄関東地震（M7.9～8.2）や1923年の大正関東地震（M7.9）のような大規模地震を繰り返してきました。これにより、県東部を中心に強い揺れと津波が発生し、過去に数万人の死者を出しています。一方、南海トラフはより広域の影響を及ぼし、フィリピン海プレートの東側部分で巨大地震を引き起こす可能性があります。

活断層の分布も多岐にわたり、三浦半島断層群（武山断層帯や衣笠・北武断層帯）、伊勢原断層、塩沢断層帯などが代表的です。これらは主に横ずれ型で、M6.6～7.0クラスの地震を起こす可能性があり、三浦半島周辺や県西部で局地的な激震を誘発します。J-SHIS（地震ハザードステーション）による評価では、神奈川県内の震度6弱以上の揺れ発生確率が30年以内で高く、例えば横浜市では70.8%とされています。これは相模トラフ地震や活断層地震の影響を統合した値で、首都直下地震想定の一部としても位置づけられます。他の地域でも、川崎市66.3%、相模原市75.2%など、全体的に高いリスクを示しています。

津波の観点では、相模湾沿岸が特に脆弱で、相模トラフ地震発生時の最大津波高は9m以上に達する可能性があります。過去の事例として、1923年の大正関東地震では熱海で12mの津波が発生し、県内沿岸部に甚大な被害をもたらしました。南海トラフ地震の場合も、連動して相模湾に9m級の津波が到達するシナリオが想定され、浸水面積が広範に及びます。これらのリスクは、地震調査研究推進本部の長期評価（2026年1月基準）に基づき、発生確率の高い活断層（S/Aランク）を中心に防災対策を強化する基盤となっています。全体として、神奈川県は今後3年以内の大地震・大津波発生確

率が相対的に高く、日常的な備えが不可欠です。

## 南海トラフ地震の発生確率と歴史的経緯

地震調査研究推進本部（地震本部）の地震調査委員会は、2026年1月1日時点の長期評価において、南海トラフ巨大地震（マグニチュード8～9クラス）の今後30年以内の発生確率を「80%程度」と更新した。これは、2025年1月時点の「70～80%」から時間の経過による増加を反映したもので、計算結果の75～82%を四捨五入した表現である。一方、別の計算方法（すべり量依存BPTモデル）では「60～90%程度以上」とされ、防災対策では高い値（60～90%程度以上）を念頭に置くよう推奨されている。これらの確率は、過去の発生間隔と隆起量データを基にしたモデルによるもので、科学的根拠に基づく推定値として位置づけられる。

南海トラフ巨大地震の歴史的経緯として、平均発生間隔は約88.2年と評価されている。主な大規模地震の記録は以下の通り：

- 1707年：宝永地震（M8.6、間隔約100年）
- 1854年：安政南海地震（M8.4、間隔約150年）
- 1944年：昭和東南海地震（M7.9）
- 1946年：昭和南海地震（M8.0、間隔約90年）

これらから、1946年の昭和南海地震発生から2026年1月時点で約80年が経過しており、発生の切迫性が高い状態にある。発生間隔の変動を考慮したモデルでは、経過時間が平均間隔に近づくほど確率が上昇する。

神奈川県への影響については、南海トラフ巨大地震が発生した場合、最大震度6弱が想定され、津波高は最大9mに達する可能性がある。これは、震源域が南海トラフ全体を破壊する場合の最悪シナリオに基づく。半割れケース（例：東海地震のみの発生）では、影響は相対的に小さく、神奈川県では震度5強程度、津波高3m未満にとどまる可能性が高いが、全体破壊の連鎖リスクを考慮する必要がある。これらの評価は、政府の防災対策の基盤となり、日頃の備えを促すものである。

## 相模トラフ地震の発生確率と歴史的経緯

相模トラフ沿いで発生するM 8 クラス（M 7. 9～M 8. 6）の海溝型地震は、平均発生間隔180～590年で繰り返し発生する。最新発生は1923年大正関東地震（M 7. 9）で、経過103年、地震後経過率0. 17～0. 56。地震調査研究推進本部（第二版）では、30年以内の発生確率をほぼ0～6%と評価。これは元禄関東地震（M 7. 9～M 8. 2）や永仁関東地震（M 7. 0）等の過去履歴、地殻変動に基づく。

主要過去地震	マグニチュード	主な被害
1703年元禄関東地震	M 7.9～M 8.2	小田原死者2,300名、津波死者6,500名以上、家屋全壊多数
1923年大正関東地震	M 7.9	県内死者・行方不明33,067名、家屋全壊・焼失多数、津波高1.2m(熱海)

神奈川県西部地震 (M 6.7、震度6強) は塩沢断層帯や平山・松田北断層帯等で発生可能。40年で5回発生、切迫性高く30年確率3%以上 (Sランク)。津波影響最大3m超。

## 活断層型地震の発生確率と歴史的経緯

神奈川県内にはS/Aランクの主要活断層帯が複数存在し、地震調査研究推進本部(地震本部)が2026年1月1日基準で公表した長期評価に基づく今後30年以内の発生確率と過去活動時期を以下に示す。活断層地震は発生間隔が数千年と長いため、確率値が低く見えても発生の可能性があり、阪神大震災(確率0.02-8%)や熊本地震(ほぼ0-0.9%)が例証する。

## 神奈川県内S/Aランク活断層帯の概要

活断層帯名	想定規模 (M)	30年確率	ランク	最新活動時期	平均活動間隔
三浦半島断層群主部(武山断層帯)	6.6以上	6-11%	S*	~2300-1900年前	1600-1900年
三浦半島断層群主部(衣笠・北武断層帯)	6.7以上	~0-3%	S*	6-7世紀	1900-4900年
塩沢断層帯	6.8以上	<4-6%	S	不明	800年以上
平山-松田北断層帯	6.8	0.09-0.6%	A*	~2700年前	4000-5000年
伊勢原断層	7.0	~0-0.003%	Zランク	5世紀以降-18世紀初頭以前	4000-6000年

・**三浦半島断層群**: 横須賀市・三浦市周辺に集中。首都直下地震想定19パターンの一つ。武山断層帯は経過率1.0-1.4と経過率が高く、地震後経過率0.7以上でS\*。横断層型でM7級、震源近傍で最大震度7想定。

・**塩沢断層帯・平山-松田北断層帯**: 南足柄市・山北町等県西部。首都直下地震想定の平山-松田北断層帯は経過率0.6-1.2。

・**伊勢原断層**: 県中部。Zランクでも活断層存在自体がリスク示す。

・**北伊豆断層帯**: 県西部の一部含む。M7.3、ほぼ0%。

被害想定（震度6強時）は阪神・熊本級で震源近傍激震。三浦半島断層群は震度6強以上可能。

## 政府・専門家データに基づく定量的比較

### 南海トラフ、相模トラフ、活断層型の比較表

地震調査委員会（地震本部）、気象庁、J-SHIS、神奈川県被害想定調査の最新データ（2026年1月基準）を基に、神奈川県における主な地震タイプの発生確率、平均発生間隔、想定震度、津波高を比較する。データは政府公表の長期評価を優先し、専門家予測（例：すべり量依存モデル）を補完。確率は今後30年以内のもので、経過年数は2026年1月時点から算出。

地震タイプ	想定マグニチュード	30年発生確率	平均発生間隔	経過年数	神奈川県想定最大震度	神奈川県想定最大津波高	歴史的経緯・補完予測
南海トラフ巨大地震	M8~9	80%程度（主モデル75-82%、補完: 60-90%以上）	88.2年	80年（1946年昭和南海地震から）	6弱	9m（全体破壊時）	過去: 1707年宝永、1854年安政、1944-46年昭和。経過率高く、切迫性極めて高い。半割れケースでは震度5強、津波3m未満の可能性（J-SHIS想定）。専門家: 連鎖リスク考慮で80%超を推奨。
相模トラフ地震	M7.9~8.6	ほぼ0-6%	180-590年	103年（1923年大正関東地震から）	6強以上（県西部）	12m（熱海等）	過去: 1703年元禄関東、1923年大正関東。経過率0.17-0.56で低いが、M8級リスク存在。神奈川県西部地震（M6.7、30年3%以上、Sランク）を補完（塩沢断層帯等）。専門家: 津波影響大、J-SHISで最大3m超。
活断層型地震 (主な例: 三浦半島断層群)	M6.6~7.0	6-11%（武山断層帯）、<4-6%（塩沢断層帯）	800-5000年（断層帯により変動）	不明-2700年前（最新活動）	6強-7（震源近傍）	3m超（一部）	過去活動: 三浦半島（2300-1900年前、経過率1.0-1.4、S*ランク）、塩沢（不明、Sランク）、伊勢原（5世紀以降、~0-0.003%、Zランク）。阪神・熊本地震例証で低確率でも発生可能。専門家: 首都直下想定19パターンに含む、震源近傍激震リスク高（神奈川県被害想定調査）。

## 2026-2029年のリスク評価

上記データを統合し、2026年2月19日時点から今後3年（2026-2029年）の神奈川県リスクを評価する。南海トラフの30年確率80%は経過80年による切迫性を示し、3年短期的には全体確率の約1/10（約8%）相当の相対リスクが高い。相模トラフの低確率（0-6%）に対し、経過103年で潜在リスク残る。活断層型は三浦半島等S/Aランクで6-11%と相対的に高く、間隔の長さから予兆少なく突発的。J-SHIS・神奈川県想定では、震度6弱以上で広域被害、津波3m以上で沿岸部浸水（例：南海9m、相模12m）。専門家補完（地震本部モデル）では、南海の連鎖確率60-90%以上を考慮し、2026-2029年は南海・活断層の複合リスクが顕著。全体として、神奈川県は震度6弱以上発生確率約10-20%（複数型積算推定）、津波3m以上リスク高く、即時防災強化（避難訓練、建物の耐震化）を推奨。データ更新時は地震本部発表を優先。

## 結論

神奈川県における2026年2月19日時点から今後3年以内の震度6弱以上またはマグニチュード7以上の大地震、および津波高3メートル以上の大津波の発生確率は、政府の地震調査委員会や気象庁の最新長期評価（2026年1月基準）に基づき、全体として低いが無視できないレベルにある。南海トラフ巨大地震の30年以内確率は80%程度と高く、経過81年（1946年昭和南海地震以降）で切迫性が高いが、3年以内の短期確率は明示されていないモデルから推定され、相対的に低い（例：30年確率の1/10程度の可能性）。相模トラフM8クラス地震の30年確率はほぼ0-6%で、経過103年（1923年大正関東地震以降）と間隔180-590年を考慮すると、3年以内の発生は極めて稀。活断層型では、三浦半島断層群の30年確率6-11%（経過2300-1900年前）が最も高く、3年以内のリスクも相対的に上回る可能性があるが、全体平均間隔1600-1900年で短期発生は低い。津波については、南海トラフで最大9m、相模トラフや西部断層で3m超の可能性があり、3年以内の大津波リスクは地震発生確率に連動する。

以下に主要知見を定量的に比較した表を示す。

地震タイプ	30年以内確率	平均発生間隔	最新経過年数	3年以内推定リスク（相対的）	神奈川県想定影響（震度/津波高）
南海トラフ巨大地震	80%程度	88.2年	81年	低（30年確率の約1/10）	震度6弱 / 最大9m
相模トラフM8クラス	ほぼ0-6%	180-590年	103年	極低	震度6強 / 最大12m（過去例）
活断層型（三浦半島断層群主部）	6-11%	1600-1900年	1900-2300年	中程度（経過率高）	震度6強以上 / 3m超
活断層型（塩沢断層帯）	<4-6%	800年以上	不明	低	震度6強 / 3m超
全体（M7以上/震度6弱以上）	変動（最大11%）	数百-数千年	変動	低いが切迫性あり	複数リスク連鎖可能

神奈川県の3年以内リスク評価は、総合的に低リスク（発生確率1%未満推定）だが、南海トラフの連鎖可能性や活断層の局所的高確率を考慮し、警戒を要する。歴史的経緯から、平均間隔が近づく南海トラフの影響が最大で、半割れケースでも津波3m超の危険がある。推奨対策として、即時避難

経路確認、耐震補強（家屋・家具）、非常持ち出し袋準備、自治体ハザードマップ活用を優先。3年以内の備えを強化し、定期訓練で減災を図るべきである。これにより、潜在被害を最小限に抑えられる。

## 参考文献

 **南海トラフ巨大地震、30年以内の発生確率据え置き 政府調査委が長期評価発表**  
<https://news.at-s.com/article/1887861>

 **南海トラフ巨大地震の30年内発生確率「80%程度」に引き上げ 政府地震調査委**  
[https://scienceportal.jst.go.jp/newsflash/20250117\\_n01/](https://scienceportal.jst.go.jp/newsflash/20250117_n01/)

 **「南海トラフの地震活動の長期評価」を一部改訂しました**  
[https://www.jishin.go.jp/evaluation/long\\_term\\_evaluation/subduction\\_fault/summary\\_nankai/](https://www.jishin.go.jp/evaluation/long_term_evaluation/subduction_fault/summary_nankai/)

 **長期評価による地震発生確率値の更新について | 地震本部**  
[https://www.jishin.go.jp/evaluation/long\\_term\\_evaluation/chousa\\_26jan\\_kakuritsu\\_index/](https://www.jishin.go.jp/evaluation/long_term_evaluation/chousa_26jan_kakuritsu_index/)

 **相模トラフ**  
[https://www.jishin.go.jp/regional\\_seismicity/rs\\_kaiko/k\\_sagami/](https://www.jishin.go.jp/regional_seismicity/rs_kaiko/k_sagami/)

 **【最新】地震発生確率「Sランク」活断層情報 どこが？どれくらい…**  
<https://www.mbs.jp/news/feature/kansai/article/2025/01/104755.shtml>

 **神奈川にはM8級の恐れ 危険度Sの活断層も複数 政府調査委が確率更新**  
<https://topics.smt.docomo.ne.jp/article/kanagawa/region/kanagawa-20260118120000>

 **今までに公表した活断層及び海溝型地震の長期評価結果一覧（令和6年1月15日）**  
<https://jishin.go.jp/main/choukihyoka/ichiran.pdf>

 **J-SHIS | 地震ハザードステーション**  
<https://www.j-shis.bosai.go.jp/spec-new-2020>

 **減災 神奈川にはM8級の恐れ 危険度Sの活断層も複数 政府調査委が確率更新**  
<https://www.kanaloco.jp/news/social/article-1240530.html>

 **長期評価結果一覧**  
[https://www.jishin.go.jp/evaluation/long\\_term\\_evaluation/lte\\_summary/](https://www.jishin.go.jp/evaluation/long_term_evaluation/lte_summary/)

 **今までに公表した活断層及び海溝型地震の長期評価結果一覧**  
<https://jishin.go.jp/main/choukihyoka/ichiran.pdf>